

な か ま

発 行

佐倉市立中央公民館
な か ま 編 集 係

〒285-0025

佐倉市鎗木町 198-3

電話 (043) 485-1801

2 ページ	海境と辞典	加瀬 清子	谷中、上野に佐倉の歴史を訪ねて	赤川 匡宏
3 ページ	有知無知三十里	村田 長保	佐倉と東京日本橋人形町	松井 弥彦

長寿願って

坪井 栄子

近年の異常気象の影響を心配していたが、季節はそれなりの面持ちでやってきた。やや遠くなった陽射しに秋の花々は、その身を懸命に輝かせている。それにしても今年の夏の暑かった事よ。歳のせいか特別に我が身にこたえた。寒さより暑さの方が、いかに身体へ負担がかかるかと証明する様に、私の両親と兄の三人共、春夏秋冬病魔とよく闘った末に、旅立っていったのは暑い盛りの八月であった。この夏、父と同じ病に見舞われた兄が、親達の旅立ちの年代より二十年も早い年齢で逝ってしまった。遺伝的な原因からか、私も肺切除手術を受けていたので不安に駆られながら、この二歳違いの兄の永遠の隠れんぼを心淋しく思うばかりであった。その葬儀の中の出来事であ

る。火葬場への移動の時、それまで手にしていた数珠が無い事に気付く、あちこち捜していたところ、甥が「おばさん、お父さんに話しかけながら花を一緒に棺に入れてあげてると思ってたよ」と話してくれて納得がいった。最後の別れの時、お棺に花々を入れながら小声で色々話しかけているうち気付かずには落としたのだ。「私をまだ呼ばないでね」こんな最後の願い事に「わかったよ。代りにお前の数珠を連れていくよ」と兄は返事をしていたに違いない。葬儀を終えて帰りの道中で、どういう訳か突然に、両親が大切にしていた湯飲み茶碗が思い出された。「あれはお棺に入れてあげたの？」と当時両親と同居していた傍らの弟夫婦に尋ねた。両親は孫から修学旅行土産にと貰った茶碗を愛用していた。茶碗に書かれてある唄が面

白いとお気に入りだったのだ。見せて貰った私も一緒に大笑いしてたのに、唄を正確には覚えていなかった事が悔やまれていた。

翌日からまるで八月終焉の悲鳴の様に各地で集中豪雨の被害発生、ここ佐倉も大雨。その中、次のFAXが届いた。

「長寿のかぞえ唄」

六十歳 人生まだまだこれから

七十歳で 迎えがきたら冗談はやめてと

八十歳で 迎えがきたら言いなさい

九十歳で 迎えがきたらまだまだ早いと言いなさい

百歳で 迎えがきたらそんなにせかす

百歳で 迎えがきたら言いなさい

百歳で 迎えがきたらただ今準備中と言いなさい

百歳で 迎えがきたらそろそろゆずる

うか 日本一

(編集委員)

海境と辞典

読めない字は辞典を引く。
意味を知りたい時も辞典を引く。小学生時代からの御多分にもれずという行為である。

ひょんなことから「海境」という文字を「うなさか」と読むことを知った。知つての上で辞典を引く。どのように表記されているのか興味津津で。

漢字二文字だからと、まず漢和辞典を引く。ところが間違ひなくあると思って引いた漢和辞典「海」の部に「海境」は無い。どんなに目をこらし見直しても「海峽」はあつても「海境」は無かつた。

この時点で「海境」は読めない字になると思う。辞典に無いのだから、永遠に読めず仕舞となつてしまったと思う。何とかして読める手立ては無いものかと思いをめぐらす。そして、漢字そのものの読みで引くことを思いつく。「か

いきよう」と読んで引いたそのページに「海境」はなかつた。前述の漢和辞典と同じ結果となつた。この上は、知っている読みで引くより仕様がなか。

常用している岩波の「国語辞典」を引く。必ずあるとして引いたこの辞典に「海境」は無かつた。「海境」は国語では無かつたのか。

次いで引いた『広辞林』には「古」海のはて。とだけあつた。

『広辞苑』には意味を記した上で、記上「海境を塞へて」と古事記を記し、万九「海境を過ぎて漕ぎ行くに」と万葉集の長歌の一部を記す。万葉集二〇巻四五四〇首の長歌、短歌の膨大な文字の中から「海境」を抽出している。辞典『広辞苑』のある幸せを感謝し、学者諸先生に満腔の敬意を表して止まない。

(白井 加瀬 清子)



谷中、上野に佐倉の

歴史を訪ねて

毎月、「佐倉歴史散策の会」で歩くが、久振りに谷中、上野界隈を歩いた。谷中七福神の寺で恵比寿さまを祀り、滝沢馬琴の筆塚と花見寺で知られる臨済宗の青雲寺という寺がある。宝暦年間(一七五一〜六四)佐倉藩主堀田相模守正亮の中興によると伝えられ、境内に平野知秋(チシユウ、重久の号)の墓がある。裏面に文化十一年八月十四日生まれ、於下総佐倉明治十六年十二月三日病歿とある。佐倉藩執政、大参事。『佐倉藩雑史』を著す。

谷中に都指定史跡の天王寺五重塔跡があるが、旧寛永寺五重塔が上野動物園内に現存する。寛永八年佐倉藩主土井利勝により寄進。同十六年に焼失し、現在の塔は同年に寄進された二代目との事。谷中霊園には、順天堂始祖の佐藤泰然の墓(甲新十六号二四側)や谷中の駐在所の前側に

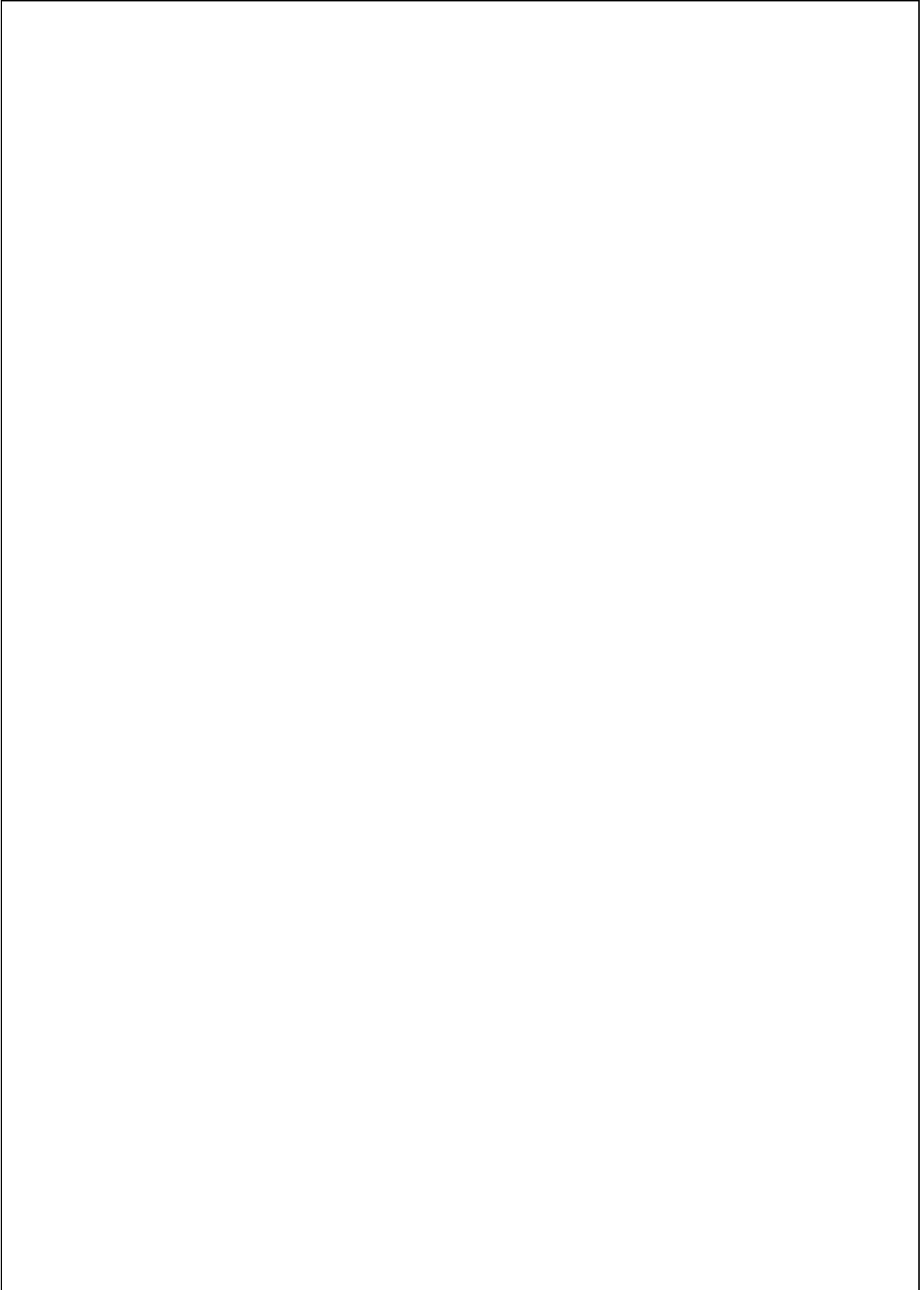
順天堂大学創始者従五位、医学博士佐藤尚中の墓(甲九号一側)、記念碑(甲四号七側)、佐倉藩重臣で漢学者の依田学海の墓(乙三号六側)がある。

上野寛永寺子院現龍院(寛永寺輪王殿横)には、佐倉藩主堀田正盛公の墓がある。慶安四年四月二十日三代將軍徳川家光が死去、正盛公はその後を追ひ殉死を遂げ、この地に葬られた。

現在、門の脇に、故林家三平師匠のおかみさんの海老名香代子さんが私財を投じて建てた高さ二・二メートルの東京大空襲(昭和二十年三月十日)の慰霊碑が建立されている。この地は江戸時代寛永寺の境内で、戊辰戦争(上野戦争)で殆どが焼失したが、今もって歩いても当時の歴史を偲ぶ史跡が数多く残されている。

東京で、佐倉の歴史を訪ね歩いてみてはいかがでしょう

(宮前 赤川 匡宏)



有知無知三十里^{ゆうちむち}

幼き日の無知は微笑ましいが、そんなことを全く忘れてしまっている成人後の自分がちよつと恐い気もする。累卵^{るいらん}の上に立っている様で。

そんな卵と卵の間を一瞥^{いちべつ}すると幽^{かす}かな記憶が蘇^{よみがえ}って来る。

「カレンダー」とは国の偉い人が決めるものだと思っていた。だから小学校三、四年の頃、ただ機械的に誰もが作れると知った時は本当に「なあーんだ」と思った。世の中って案外つまらなく、単純に出来ているとえらく感心（？）したものだ。世の中を甘く見る悪癖はこの時芽生えたのかもしれない。

「鉄道」を知ったのもその頃だったと思う。二本のレールの上を走る交通手段ということは絵本や都電（私は東京下町で生れ、育った）で分かっていた。



（新臼井田 村田 長保）

とはいえ、都会を離れた郊外や田畑、森、山の中まで二本のレールが敷いてあるとはどうしても信じられなかった。人口の多い都市部や駅周辺は軌条がしっかり固定されていないと安全面、管理面から危険だ。だから二本のレールは必要かもしれない。併し野原や畑、森や山にあんな立派な鉄製のレールが枕木と共に延々と敷かれていなんて考えられなかった。都会を脱ければあとはクルマと同じ様に地面を自由に駆け巡るのだと信じて疑わなかった。

当時、鉄くずで小遣い稼ぎをした経験から、金属が逆も貴重だという意識がそうさせたのかも。

佐倉と

東京日本橋人形町

東京日本橋人形町一ノ十二の『お茶の木神社』をご存知ですか。地下鉄日比谷線『水天宮前駅』八番出口を地上へ出ると一段と聳える日本橋人形町再開発の店舗・住宅等が入る三十九階建ての『リガーレ日本橋人形町』があるが、ここにある神社こそ『お茶の木神社』です。

神社の御祭神は倉稲魂大神（ウカノミタマノオカミ）で伏見系の稲荷様です。

この土地は徳川時代約三千坪に及ぶ下総佐倉の城主堀田家の中屋敷で、庭園は芝生とお茶の木で見事であつたらしい。この神社はその守護神として祀られていたものです。

その中屋敷内は勿論のこと周囲の町方内にも永年火災が起こらなかつたため、何時の頃から誰云うともなく火伏の神として崇められ、堀田家では初午祭の当日だけ開門して

一般の参拝を自由にされた由。『お茶の木様』の愛称で町の評判も相当であつたと伝えられておりました。

昭和六十年布袋尊を御遷座合祀申し上げて日本橋七福神に加わる事となりました。

以上が『お茶の木神社』由来の抜粋ですが、今回偶然人形町にお茶の木神社の存在を知る機会に接し、早速出向き更に神社の説明板に佐倉堀田様の項を見付けました。

そこで地元町会役員のI氏及び神社前でパン屋を営むM氏、など地元長老達を数度に渉り訪問調査致しました。その結果を今回皆様に御報告致しました。

今度、機会がございましたら、『お茶の木神社』と併せて日本橋七福神めぐりをされてみては如何でしょうか。

（並木町 松井 弥彦）



11月の黒板

『なかま』原稿募集のお知らせ

『なかま』の2・3面は、市内の皆様の投稿によって作られています。原稿は随時募集しています。

【原稿規定】 字 数 650字（13字×50行）以内。ワープロによる原稿（縦書き）でも結構です。

内 容 随筆・・・日常の出来事、生活の中で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などご自由にお書きください。

『なかま』に対するご意見・ご感想などもお待ちしております。

いただいた原稿は、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただきます。

問い合わせ 佐倉市立中央公民館（第2・第4月曜日は休館日です）

電話 485-1801

URL <http://www.city.sakura.lg.jp/kominkan/cyuou/index.htm>

さくら道



還暦を過ぎて、妙に昔の友達に会いたくなった、と言うことはありませんか？

思い立って、四月中旬、幕張のホテルで久しぶりに中学校の同級会を開催しました。

私が育った学校は、山紫水明名山のふもとの小さな学校で、各学年とも一クラスだったため、同級生は小学一年から中学三年まで同じクラスで一緒に過ごした、兄弟のよう

な絆を感じる仲間でした。

顔を合わせれば、一瞬のうちには十五の子供に返って、延々と八時間に亘り、甘く切ない思い出話が続きました。

翌日、川村記念美術館の研究所に至るつつじ咲く散策路で、期せずして流れてきた校歌に振り返れば、わらべ顔なる君が微笑んでいました。

友よ。また逢う日まで、元気で生きて行こう。と思いついて、佐倉駅で見送りました。

（猪瀬 信彦）

あがとき

六〇年で再び生れた年の干支に還る―還暦を過ぎたら、人生は新規時き直し。六〇歳人生はまだこれから―なのです。

「幼き日の無知」には考えさせられました。これらは、子供自身の自由な発想から生み出されたもので、常識に捕われた大人にはとても考え及ばないことです。もう忘れて

しまったかも知れませんが、この種の思い込みは、誰でも一つや二つ持っていたのでは。大人になって、ひとは既成の見方ではなく物事を考えなくたってしまったような気がします。還暦を過ぎたあたりで“自由の身”となる人がほとんどではないでしょうか。時には、常識をカッコに入れて物事を考えてみるというのはどうでしょう。世の中が少し違って見えて、新鮮に感じられると思います。

（巴）